

『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 (前半) 日本語訳

本通信第35号で、楊寿彭編集『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』（1914年発行）の「目録」と「序」を取り上げました。続けて、本第36号では、同著の「壽言」前半分の原文と現代日本語訳を掲載いたしました。原文典拠は、前第35号同様、神戸華僑歴史博物館所蔵「陳徳仁コレクション」の複写資料です。「壽言」の後半分については、第37号に掲載の予定です。

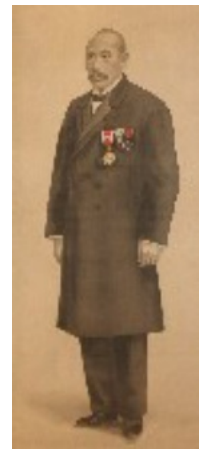
本第36号では、「壽言」（前半）をさらに6分割して掲載いたしました。現代日本語訳については、編集委員の力不足で不適切な箇所も多々あるかと思えます。ご叱正願います。

なお、縦書きですから、各頁、右から左へ読み進めてください。

(編集委員 橋 雄三)

1

五等嘉禾章受章 僑日神戸華商總會総理
浙慈 呉錦堂先生還曆祝詞



鄭の商人弦高
は(秦の軍に、鄭の使者と偽って)、先ず四張の皮革

を贈り、その後、十二頭の牛を贈り、敵を退けました。越王は計然の五策を用いて国を強くしました。

これは中国において、商戦にて人国を侵滅させた最初です。漢の時代、卜式は家産をなげうって辺境の軍糧としました。王孫卿は財を持って士を養いました。これは、中国商人が郷国に忠誠を尽くしたはじめです。秦の時代、烏氏の嬴(ら)は、戎の王と家畜を売り買っていました。

(嬴が珍しい絹織物を贈ると、)戎の王は値十倍の家畜を与えましたので、谷を単位に牛馬を量るまでになりました。漢の時代、蜀の卓氏と程鄭はともに、鉄の冶金を業としていましたが、滇や蜀の人々、あるいは、頭髪を髹結(ついでい。さいづちまげ)にした人々と交易しました。これは、中国商人が、馴染みのない地へ移住した初めです。書籍を見ながら近世を一つ一つ調べてみますに、もとよりわが国民が工商に秀でる特性をもっていることを知っています。数千年を経て、なおまだなくなっています。しかし、赤貧か

ら身を起こし、巨億の利を得、異国の籍を取りながら、宗国の急難に際し、熱心に利を興し才を育て、ただひたすら、自らの財を役立てることだけを考えた人などいません。

不幸にして、国勢は衰微し、おおくの禍乱に遭遇しており、大きな計略を表明することはできません。弦高や計然がしたようなことは、そもそも、時世に制約されます。もし歴史上その美德を一身に兼ね備えた人物を挙げるとすれば、わが呉錦堂先生のような方こそ、古今、たびたび出会うことはありません。

(補注・原文5行目「嬴」は「嬴」の間違いか)
(以下、次頁へ続く)

頒給五等嘉禾章僑日神戸華商總會総理浙慈吳公錦堂
六旬壽言

鄭弦高以乘韋十二而退敵。越王用計然五策而強國。是爲中國商戰侵滅人國之始。有漢之世。卜式則毀家餉邊。王孫卿則以財養士。是爲中國商人效忠鄉國之始。秦時烏氏嬴市畜戎王。戎王十倍其償。至用谷量牛馬。漢蜀卓氏與程鄭均以鐵冶買滇蜀民。或髹結民。是爲中國商人殖民異域之始。載觀往籍。歷驗近世。固知吾國民秀於工商之疇性。歷數千禩。而猶未沫也。矧又起赤貧而贏鉅億。占籍異邦。熱心宗國急難。興利育才。惟恐財力不出于己。不幸國勢衰微。多遘禍亂。致不克發揮雄略。如弦高計然之爲者。夫亦時世限之而已。若夫學歷史人物。兼其美於一身。如吾 吳公錦堂者。古今以來。誠不數數覩也。

『浙慈 吳錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 日本語訳 (その2)

2

先生は姓は吳、名は作鑛、字は錦堂、浙江省慈谿縣人です。父麟初先生には五人の男子があり、錦堂先生は長男で、家は代々、農業を営んでいました。

清の咸豊・同治の戦禍(太平天国を指す)のち、学業をやめ、農耕に勤しみましたが、連年不作で、改めて商売を習いました。商店の雇い人となり、蘇州・上海間を往き来しました。極めて困難な状況でしたが、先生は、かわることなく、しかも睡魔にもかかわらず、学業に精を出しました。仕事の余暇に学習を続け、昼夜、いつも、一冊の本を手にし、担当の人に教えを求め、わかるまで懸命に努力しました。このようにして数年、みんなに重きをおかれ、高給でさそわれるようになりました。

清光緒甲申(一八八四年)の中仏戦争後、吳先生は、本国商業がまさに疲弊しようとするのを予見し、この



吳錦堂の生家(編集委員撮影)

国で商売をすることはできないと渡海来日。日本に着いた日、辛李二君と千両を出し合い、十分の一の利を追って、長崎と神戸を行き来、巧み

に売り買いし、年ならずして、数倍の利を得ました。

光緒甲午(一八九四年)、中日戦争後、商売は益々拡張、だんだんと数十万になりました。光緒乙巳(一九〇五年)、日露戦争に際しては、祖国が戦場になつていたので、先生は義を重んじ、日本との友好につとめ、兵を救い献金をし、全力でこれを援けました。このことをもって、ますます日本人に重んじられることとなりました。

しかし、先生は、富有になつても商売に勤めました。たしかに、常人には及ばないことです。商売の策を練り、郵便、電報がひっきりなしに配達され、たびたび、一晩中一睡もしない夜をかさねて、二十余年、やつと、願いがかないました。そもそも、今昔、国を立てるに、文明と野蛮では、その方法が異なります。秦漢の時代、贏(ら)と卓氏、程鄭は、みな、蛮夷の地で財産

公姓吳氏名作鑛字錦堂浙江慈谿縣人。父麟初先生有丈夫子五人。公次居長。家世業農。清季咸同兵燹後。輟讀而畊。歲又比不登。乃改習買業。既成備於商肆。往來蘇滬間。境綦困。顧公仍能困衡於學。執業餘暇。不廢誦肄。晝夜輒手一卷。求教於司事者必力期其徹悟始已。如是者有年。人爭愛重之。群以厚幣羅致。前清光緒甲申。中法戰後。公逆料本國商業行將日弊。不可與有爲。渡海來日本。初至日。與辛李二君合資千兩。遂什一長崎神戶間。善棄取。不期年而獲利倍蓰。光緒甲午。中日戰後。業益張。寢至數十萬。迨光緒乙巳。日俄戰役。爲兵結祖國。公義主善鄰。恤兵輸捐。咸力助之。以此益見重於日人。然公雖富有。而勤于居業。實有非常人所及者。每當推算取求。函電紛沓時。屢屢距宵徹旦。目不交睫。閱二十餘載。久而始償其願。夫今昔立國。文野殊致。秦漢時。若贏與卓氏。程鄭。均殖業于蠻夷之地。其民榛狉。故操奇計。贏弋利孔厚。若日本者。自維新後。工商進步。日異月新。前清中日戰後。華商權勢與國疆並蹙。

を増やしました。その民は、未開、愚昧であつたので、奇を操って贏(利益)を計り、大もうけしました。

ところで、日本は明治維新後、工商業が日進月歩しました。その一方、日清戦争後、華商の勢力と国土はともに窮してしまいました。

(以下、次頁へ続く)

『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 日本語訳 (その3)

3

そこで、先生は、一人早く機を見、赤手渡日、遂に、数百万の財を手に入れました。才智が強力で、はるかに尋常の能力を超えていないなら、どうしてここまでできたでしょう。

昔、白圭の商術は、智勇仁強の四徳を組み合わせたものでした。先生は、ほとんど白圭の言に合っています。しかも、かつて私が見た世の中の金持ちたちは、田や家屋は立派でも、少しばかりの金をけちったり、甚だしきは、贅沢浪費を誇ったり、また、花鳥園を広げ、声色をほしいままにしています。これはみな、徒に積財を知っているだけで、その財の善用を知らないのです。よって、我が国で今日、古に、数代続いた富者を求めようとしても、めったにありません。しかし、先生の事績はこれらの例と大きな違いがあります。

光緒庚子（千九百年）、義和団が禍を惹き起こしました。光緒帝と西太后は、難を避けて西安に逃げました。先生は国難に心を痛め、銀二万両を献納しましたが、特旨をもって、先生の

■宮城谷昌光は、小説『孟嘗君』で、白圭に次のように語らせています。「『義を買い、仁を売ります。利は人に与えるものだと思っております』 社会的責任において買ったものを心で売る。そこで得た利益を世の人に還元するということである。」（編集委員付記）

長男啓藩は挙人を賜りました。同じころ、江南の河川防備は急を告げ、再び銀一万両を献納、同じく、特旨をもって、先生は花翎道銜、並びに二品封典の榮譽を賜りました。

光緒某年、寧郡に属する各地で、飢えた民はみんな、暴動を起そうとしました。先生は、米を運び放出し、飢えた民の救済をはかり、さらに救済に代えて仕事を与えました。また、祖廟を修理し、溝を浚え、道路を平らにしたので、郷里の人々は事なきをえました。

神戸に、以前、山荘があり、ここは、華僑が棺を託すところ（仮埋葬の墓）となっていました。山荘は小さな丘の上であり、四周は官有道でした。付近に住んでいる人たちが、だんだん、土地を占有し、丘（墓）は日に日に荒れてきていました。

幸い、先生は、このことを日本の当局に説明し、買い戻すことができました。すなわち、

乃 公以見機獨早。赤手至東海。竟坐致數百萬。非才智強力。迴絕恒幹。詎克臻是。昔白圭之論商術。配以智勇仁強四徳。公殆克副其言矣。且吾嘗見世之躬席富厚者矣。或豐田廬而畜錙銖。甚或矜靡飾侈。廣其園囿。恣其聲色。是皆徒知積財。而不善用其財者也。故吾國今日。欲求古所謂富延數世者。藐焉難覩矣。然 公之行事。則有大異於前所云者。光緒庚子拳匪肇禍。兩宮蒙塵西安。公痛念國難。報效銀二萬兩。得旨賞子啓藩舉人。同時江南江防告急。再報效銀一萬兩。得旨賞 公花翎道銜。並二品封典。光緒某年。寧郡各屬。饑民咸思變。公運米平糶。旋用以工代賑。計修宗祠。濬渠平道。鄉族以安。神戸舊有山莊。爲旅日者寄櫬所。莊居小丘上。四周均官有道。附近居人。日往取土。邱日圯而勢不可爭。幸 公爲白之日當道。得購回。乃建石級固之。又中華會館址甚隘。又購回官有道。基益擴。因增置客廳居室等。公先後捐金一萬二千二百餘元。監工三年。勞怨不辭。神戸諸同胞。俱深感之。

(以下、次頁へ続く)

『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 日本語訳 (その4)

4

これらはすべて、先生が五十歳以前のことです。当時、勘定しますと、先生の積み重ねた財貨は、僅か、今の財貨の十分の二、三に過ぎません。しかし、忠国・利衆の行動は既に、抜きんでて素晴らしいものでした。このような事蹟は晩年、ますます増え、尽忠・施徳は祖国と僑地、双方で倍増しました。また、もつともなことではありませんか。

光緒二十八、九年（一九〇二、三年）、直隸、東三省、雲南、淮、徐、広東、などともに、災難がかさなりました。先生は、災難の度に、何度も救済し、総額は、三万余両に達しました。駐日公使及び、両江総督が前後して奏上、皇帝から褒章、並びに、「樂善好施」の字句の扁額



呉錦堂墓前から白洋湖を望む
(画像は陳徳仁コレクション)

年) 清の皇帝徳宗は、

扁額（「清史集林」）を下賜、併せて、褒賞の旨を下達しました。時に、先生は、寧郡師範学校、及び府教育會、上海旅滬学会に三千元を援助しました。また、神戸の萬国病院、及び華強学校に二千元、あるいは千元を援助しました。更にこれら以外で、慈善事業へも、すこぶる多くの援助をしています。

を賜りました。

日本神戸同文学

校は、華僑の子弟が在学するところ

ですが、光緒二十六、七年（一九〇〇、〇一年）の開

学以来、先生は初めから、いまに至るまで、前後、一万余百元の寄付をしました。光緒三十三年（一九〇七

此皆 公五旬以前事

也。計其時。公所積費僅直今賞十之二三。然忠國利衆之舉。已卓卓可傳如此。此其晚境益豐。而効忠施徳于祖國僑地之事。滋益倍夥。不亦宜乎。光緒二十八九年。直隸東三省雲南淮徐廣東均疊告災。公累助賑三萬餘兩。先後由駐日公使及兩江總督奏聞。蒙傳旨嘉獎。並給樂善好施字樣。日本神戸同文學校者。華僑子弟肄業處也。滙始于光緒二十六七年。公自始事至今。先後捐金一萬數百元。光緒三十三年。清帝徳宗欽賜匾額。並傳旨嘉獎。時寧郡師範學校。及府教育會。上海旅滬學會。公亦助三千元。又神戸之萬國病院。及華強學校。亦有資助數二千或千元。餘慈善助欸甚夥。此皆 公五旬以後。贊助內外國教育慈善諸舉事。然其中最鉅者。莫慈北水利學校二事若。慈北一隅。負山面海。水利至艱。又與餘姚接壤。地形姚高而慈卑。諸山出水。慈北輒災。昔人病之。於是浚杜白二湖。築四浦。開漾塘。瀦蓄隄防始具。民田利之。惜爲勢豪占斷。

大のものは、慈北水利と学校の二事業です。慈北一隅は山を負い、海に面し、水利はきわめて困難です。また、余姚と地を接し、地形は余姚が高く、慈溪は低くなっています。山々が出水すると、慈北はすぐに災害がおこり、昔、人々はそのことを案じました。そこで、杜白二湖を浚い、四浦を築き、

池塘を開き、貯水堤防は初めて備わり、民田はこれらの恩恵を受けていましたが、惜しいことには、勢力ある富豪の占有するところとなっていました。

(以下、次頁へ続く)

『浙慈 吳錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 日本語訳 (その5)

5

古いしくみはいよいよ壊れ、民間で
は、水利をめぐる、だんだん、もめ
ごとが起こるようになり、命を落とす人、一族
損なわれる人は、どれほどの数にのぼるかわか
らないほどでした。

光緒三十二年（一九〇六年）の秋、先生は帰
国し、墓参りをしました。そのとき、長雨が降
り続き、郷土の村は、数百頃（一頃は百畝）の
綿花や稲が水没しました。先生はこの状景を目
撃し心を痛め、私財をなげうつことを誓い、故
郷水利の永久の根本となるよう、池塘、淹竺・
松竈などの諸浦、及び杜白二湖、たくさんの池、
岸、堤防、水門、減水ダム、石橋などを創建・
修築しました。これによって、貯水の仕組みは、
やっと、すべて復旧し、湖浦付近諸田畝の水稲、
綿花の作柄は、百余万増えました。同時に、水
利局を設立し、水利管理規定を制定し、これら



杜湖水門の緊急工事を監督する吳錦堂
『続刻杜白兩湖全書』より

を久しく後世に残
し、また、（近湖
奸民が湖を侵して
私有した）田を買
戻しました。更に、
湖境界を測量、図
面を作成し、もつ
て禍根を断ちまし
た。その事業のな
んと広大であるこ
とでしょう。

先生は、この水
利事業に際し、い
つも裸足で数十里
を馳せまわり、昼
夜なく工事を監督
しました。或る日、
杜湖堤防で工事を

監督しているとき、大雨にみまわれ、高波が堤
防に跳ね上がり、先生は、すんでのことで、溺
れるところでしたが、先生は落ち着いていまし
ました。日本の測量士、島總彦君はこれを見て、深
く感動、写真にとり、『続刻杜白兩湖全書』の
序に載せています。

また、ある年、先生は、故郷の水利事業のた
め、帰国を要請する一通の電報を受け、愛する
娘が急病で、命が危ぶまれるときでしたが、一

舊制益壞。民間爲水利釀争訐訟。
傾命圯族者。不知凡幾。光緒三十二年秋。公歸國省墓。時
霖霖爲災。全鄉數百頃花稻悉沒鉅浸中。公目擊心傷。誓
竭一己之血資爲故鄉水利規永久。將漾塘淹竺松竈諸浦
及杜白二湖諸塘岸隄閘減水壩石橋等。剏建修治。滌蓄之
制始全復舊。湖浦附近諸田畝植禾棉者。歲增百餘萬。且立
水利局。及水利善後章程。以垂久遠。購回占田。測繪湖界。以
絕禍本。其爲計也宏矣。公於興復水利時。每赤足馳數十
里。罔晝夜督工。某日在杜湖隄監工。會大雨。高浪激堤。公
幾溺。然神色自若。日工程師島總彦君見之。深爲感動。攝影
贈序爲誌。又某年。公爲故鄉水利。得電遣歸。適愛女病篤。
竟割愛不視。萬里歸鄉。專理其事。計先後工事者。閱三四年。
共出資七萬奇。始得蔽功。嗚呼。公之精神意量。其高遠誠
不可及哉。

切を顧みず、万里の道を帰郷、事態の解決に当
たりました。計算すると、工事は、前後三、四
年かかり、合計出資額は七万余になり、やっと、
大事業は完成しました。ああ、先生の精神、願
いの高遠なること、とても、及びもつきません。
（補注・原文2行目「圯」は「圮」の間違いか）
（以下、次頁へ続く）

『浙慈 呉錦堂先生六旬榮壽録』 「壽言」 日本語訳 (その6)

6

また、先生は言います。慈北は風俗は質朴で民に学問がない。国家立憲のために最も必要なのは地方自治で、地方自治を創ろうとすると、是非とも、学を興し人才を造らなければならないと。その思いで、慈北に錦堂学校を開設しました。まず、校舍敷地となる五十余畝（一畝は十五分の一ヘクタール）を切り拓き、数里（一里は五百メートル）に及ぶ水路を開き、洋風の建物五十二棟、平屋十九間、養蚕、糸繰などの部屋四十余室を建築し、実習用の桑園、農場など千二百六十畝を設置しました。鉄道株二萬、漢冶萍公司株五萬を以てその基金としました。前後、学校への出資は二十二



「錦堂学校」の校舍
二〇〇八年、編集委員撮影

萬余で、水利・学校兩事業への出資は、合計二十九萬余でした。こうして、慈北における興業、育才は成りました。始めはある程度、紳士名望家の連名上申書により、浙江巡撫は調

査を命じ、結果、その通りだったので、浙江巡撫增韞（人名）は、特別案件として褒奨を上奏、先生は宣統三年（一九一一年）、四品京堂候補を賜りました。この秋、武昌で軍が起ち、諸省が呼応しました。同じ時期、慈溪は海嘯にみまわれ、綿花、稲、ことごとく水没しました。諸暨地方もまた水害に遭い、数百万の住民が泣き叫び食を求めていましたが、各地の軍隊は右往左往していました。救済の方策は行き詰まり、たちの悪い住民が扇動し、まさに、大きな事件が起ころうとしていたときに、各省は米の放出を閉じました。先生は急を聞き、虞和徳に、なんとか米を買い付けるように電報を打ち、一方、土地の有力者たちに、救済物資が公平に行き渡るよう運営することを頼みました。この時の出資額は合計、三万八千余円になりました。郷里は、これをもって、平穩となりました。浙江都督朱

公又謂慈北俗樸鄙。民不知學。爲國家立憲計。莫要於地方自治。欲創地方自治。非興學造才不可。在慈北設錦堂學校。闢基五十餘畝。開渠若干里。建洋房五十二幢。平房一十九間。蠶桑繅絲等室四十餘所。置桑園農場校產等。千二百六十畝。以路股二萬。漢冶萍公司股五萬爲其基金。先後出資二十二萬餘。水利學校兩事。共出費二十九萬餘。而慈北興業育才。始有所藉手。紳耆銜徳。公呈浙撫飭委查復果信。浙撫增韞。爲專案奏請核獎。宣統三年奉旨以四品京堂候補。是秋。武昌軍起。諸省響應。時慈邑被海嘯患。花稻悉沒諸暨亦遭水災。數百萬居民。嗷嗷待哺。而各地軍事旁午。賑貸計絕。莠民潛煽。鉅變將發。時各省閉糶。公聞警卽電致和徳。設法購米。一面請諸紳平賑兼辦。計出資三萬八千餘圓。鄉里以安。浙都督朱。據邑紳呈請大總統獎五等嘉禾章。餘尙捐助滬寧各軍府。暨紅十字會洋三萬二千餘元。



瑞（人名）は郷紳をして、大總統へ、先生に五等嘉禾章を授けるように上申させました。以後、さらに、上海、寧波軍政府、及び赤十字会に銀三万二千余元を寄付しました。（以下、第37号へ続く）